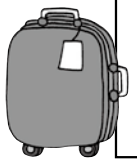
「茶旅」
“こぼればなし”

(3) インド ムナールで煎茶作り？

コラムニスト　須賀　努



元々は中国茶が好きになり、その後台湾茶に波及し、茶旅を続けていた。しかしちょうど4年前に勤務先を辞め、本格的に茶畑を歩こうと思った時に、その活動範囲を『中華圏』から『アジア』へ広げた。アジアへ行けば、世界の茶畑のうち、かなりの部分をカバーできると思ったからだ。そしてアジアへ範囲を広げることは『緑茶』中心世界から『紅茶』世界へ足を踏み入れることを意味していた。

3年前にインドのダージリンへ行き、5日間茶園のある村にホームステイした。その地、マカイバリは日本でも有名な紅茶産地であり、広大な敷地の3分の2は原生林、3分の1だけを茶畑としている、自然豊かな光景には正直圧倒された。その4代目茶園主、ラジャ氏はバイオダイナミック農法を取り入れ、有機農業を実践、大の日本びいきで、日本にもファンが多い人物だ。ラジャ氏と茶園を散策している時に言われた一言が今も忘れられない。『最近インド人が紅茶を飲むようになったよ』と。

インドの一般人は『チャイ』を飲んでいる。このダストを使ったティを紅茶と呼ぶかどうかは別として、ラジャ氏にすれば『チャイは紅茶ではなく別の飲み物』ということだろう。そしてこの発言は急速に所得向上し、中産階級が生まれると、『健康志向』が芽生え、砂糖を多く使うチャイを敬遠する向きが出てきたということを意味している。

インドにはダージリン以外にもアッサムなど著名な茶産地がある。筆者は一度南部の茶畑を見てみたくなり、ニルギリを目指した。だが案内を依頼したインド人の友人が勘違いをして、ニルギリからは400㎞も離れたケララの山中、インドでは避暑地として名高い、ムナールという場所を図らずも訪ねることになった。

確かに茶園は多く存在し、車窓から茶畑が沢山見えたので安堵したのだが、何とほとんどの茶畑には立ち入り禁止の柵が施してあり、茶工場を訪ねても、警備員の『門前払い』に遭ってしまった。一体これはどうしたことだろうか。実はこの地の大部分はインド最大の財閥であるタタグループ関連の茶園であり、一般人との取引をする必要がなかったのだ。因みにタタはインドでスターバックスに投資しており、ここのお茶が供給されていると思われる。ムナールの茶関連の会社の株は従来タタが主要株主だったが、現在は各茶生産者を株主にした。生産効率を上げる一つの方策だったのでは、と考えられる。

見られないと言われれば見たくなるのは人間の心情。ムナールでは各茶工場に入れない代わりに茶博物館を設置しており、そこで製茶体験や、茶の歴史を見ることができる。見学者は一団となって、説明者の後について館内を回るのだが、その説明者の言葉に耳を疑った。『皆さん これからは緑茶の時代です。紅茶ばかり飲んでいないで緑茶に目を向けましょう。日本人は毎日煎茶という緑茶を飲んでいるから長生きなんです』と声を張り上げて説明していたのはここの研究員、スニール氏。

『現代の日本人が毎日煎茶を飲んでいるとはとても言えない』と思い、スニール氏を訪ね、話を聞いたところ、『インドはこれから健康重視だ。何とかチャイから脱却したいが、それには紅茶ではダメなんだ。緑茶が良いと聞いたので、その日から2年間、勤務終了後毎晩ネット検索で緑茶の製法から成分、効能などを調べたよ』という。その結果、日本の煎茶が良いという結論に達し、先ほどの説明になったらしい。『だがこれは机上の空論さ。ムナールで緑茶生産は始まっているが、実際に煎茶を作る技法は誰も知らない。もし誰か日本から教えに来てくれたら有難いのだが』というではないか。こんなニーズに日本が応えられる手段はないのだろうか。

茶博物館で説明を聞くインド人観光客

因みにムナールにはタタ関連以外の茶園もいくつかあり、その1つを訪ねると、『この茶園は1890年頃、中国人が茶樹を植えた』と言われて驚いた。インドに茶樹が植えられた理由、それはイギリス人がお茶を欲しがったからだが、そのお茶とは中国種だった。本当に中国人が植えたかどうかは定かでないが、いまだにそんな話をしている。更に言えば、ムナールから車で1時間行き、そこからジープで30分山道を登ったところに、世界最高地の紅茶工場と謳っている所があった。2160mだというがそこのお茶はお世辞にも美味しいとは言えず、実にもったいない。まだまだインドには技術改良の余地が残されている、と思う。

（すが　つとむ）